

トマス・アクィナスにおける神学と哲学

芝元航平

ご紹介にあずかりました芝元と申します。よろしく
お願いいたします。本日お話しさせていただく題は、
「トマス・アクィナスにおける神学と哲学」という、い
かにも漠然とした題名になっているかと思えます。ト
マス・アクィナスの神学と言いますと、皆さん『神学大
全』(*Summa Theologiae*)という主著を思い浮かべられると
思います。もちろんそのとおりでありまして、これは
非常に大きな体系的著作であるわけです。これは、皆
さんをご承知のことと思いますが、日本語訳も創文社
によって一九六〇年から刊行されておりまして、二〇

一二年でしたか、二十一世紀になってようやく完結し
ています。この翻訳は全体で四十五巻にもなるという
非常に大きなものです。本日は、その『神学大全』の中
でも、トマスが「神学と哲学」の関係、ひいては「信仰と
理性」の関係をどのように理解していたのか、という
ことを軸にしてお話しさせていただきたいと思えます。

1 生涯と『神学大全』の概要

アリストテレス哲学を学び、位置づけ、活用する

トマス・アクィナス (Thomas Aquinas 1224/25 -

1274年)は、アウグスティヌス(Augustinus 354-430年)やアンセルムス(Anselmus 1033/34-1109年)と並んで、中世ヨーロッパ最大の神学者・哲学者であるとされているわけですが、彼にとつての最大の課題は、アリストテレス(Aristoteles 前384-322年)の哲学に対してどういう対応を取るかということにあったと言えると思います。

十字軍の遠征を契機として、アリストテレス哲学というものが十二世紀以降、西欧に本格的に導入され、知られるようになってきました。それまでヨーロッパでは、アリストテレスの論理学の一部分しか知られていませんでした。そうすると、それまで知られていなかった論理学、形而上学や、倫理学、政治学といったアリストテレスの体系的な哲学と、キリスト教の信仰との関係をどう考えるのかということが、ヨーロッパで大問題になったわけです。

当時のヨーロッパには、特にイブン・ルシュド(Ibn Rushd 1126-1198年)——ヨーロッパではアヴェロエス(Averroes)の名で知られていました——という

イスラームの哲学者のアリストテレス解釈に基づいて「知性の単一性」ということを主張した人々がいました。これは、すべての人間には知性が一つしか存在しないという主張です。あるいは、「世界の永遠性」という主張、つまり、この世界が永遠の過去から存在していたということが理性によつて哲学的に論証可能であるという主張をもつ人たちが出てきました。

これらの主張は、キリスト教の信仰とは相容れない哲学的主張であるということになるわけです。たとえば、知性が一つしか存在しなければ個人の責任ということが問われることがなくなってしまうです。そうすると、罪とか善悪とか、あるいは個人の道徳や救いということが成り立たなくなってしまうという問題があるわけです。また、「世界の永遠性」ということを主張してしまつと、キリスト教の信仰では、旧約聖書の「創世記」の冒頭に、「初めに、神は天地を創造された」(第一章、第一節、新共同訳)と書いてありますので、それと矛盾してしまいます。そういうキリスト教の信仰とは相容れない主張をする「ラテン・アヴェロエス主

義」、あるいは最近では「急進的アリストテレス主義」と呼ばれたりもするわけですが、そういうことを主張する人々が現れてきたわけです。そうすると、保守的な神学者からは、アリストテレス哲学というものが危険思想の一種として敵視されることになりました。こうして、アリストテレス哲学の本格的な紹介導入ということ为契机として、「神学と哲学」「信仰と理性」の関係というものが非常に大きな問題になってきたわけです。

この問題に対するトマスの基本的な立場は、「信仰」と「理性」は対立するものではなくて調和するということです。一方には、信仰に基づく神学があります。神学は、信仰を前提とするわけです。その一方で、人間の理性に基づく哲学も同じ一つの真理を述べているわけです。一つの真理を述べている以上は、両者の主張が矛盾するということはないはずだということになります。それがトマスの基本的な立場と言えるかと思っています。

このことをよく表しているトマスの言葉に、「恩寵は

自然本性を廃棄するのではなく、これを完成する」（『神学大全』第一部、第一問題、第八項〔創文社版、第一分冊、二五頁〕を参照）というものがあります。「恩寵」——「恩恵」とも言います——はラテン語では「グラティア」（*gratia*）で、「自然本性」は「ナトゥーラ」（*natura*）です。つまり、英語の *grace* と *nature* です。自然本性はそれだけの事物が本質的にもっている在り方、もののありのままの「本性」のことですが、恩寵はその自然本性を超えた神からの恵みのことを言います。トマスのこの言葉は、この両者が対立しないということを意味していますが、それと同時に、自然本性はそれ自体では不十分で恩寵によって完成される必要があるということも意味しています。

トマスは理性に基づく哲学、あるいは哲学的諸学問——当時の哲学は自然学や数学なども含む非常に幅広い意味で捉えられていました——そういう哲学的な諸学問が学問として自立していると考えていました。一方、トマスが所属していたドミニコ会と同時期に成立したフランシスコ会という修道会がありまして、その

フランシスコ会学派最大の神学者にボナヴェントゥラ (Bonaventura 1217/21-1274年) という人がいますが、彼は信仰の援けを得ない哲学は必然的に誤りに陥ると考えました。つまり、哲学は単独では必ず誤りに陥ると考えたわけですが、そういう立場とは対照的にトマスは、人間理性というものを非常に信頼していたと言えるかと思います。

このような人間理性に対する信頼を背景にして、トマスは信仰をどう考えるかという点でも非常に興味深いことを語っています。それは、「暗黙的な信仰」という概念です。もっとも、トマスはそれを主題として論じているわけではなくて、明示的な信仰が必要だという主張との関連で議論しているにすぎないと言えます。確かにそのとおりです。

ただ、私は、この「暗黙的な信仰」という概念は、キリスト教以外の宗教の信仰を真の信仰として認めることができるだけではなく、ある観点からは他宗教の信仰者がキリスト教の信仰者よりも大きな信仰をもつ可能性をも認めることができるものではないかと考え

ております。その点で、今日その重要性がさかに言われている「宗教間対話」というテーマにおいても非常に大きな意義をもつのではないかと思います。一般には、トマスには、護教的な、つまりカトリック教会の教義・ドグマの守護者みたいなイメージがあるわけですが、そういうイメージとはちょっと違うトマスの一面を示せるのではないかと思います。

トマスは、アリストテレス哲学を用いてゴシック建築にも譬えられるような壮大な神学の体系を『神学大全』という著作としてつくり上げたと言われています。もちろん、そのとおりでありまして、トマスが築き上げた体系が、現在のカトリック教会においても教義神学——組織神学とも言います——の大きな枠組みとなつていっていると言つてよいと思います。そして、そのようなトマスの神学の背景には、ある意味非常に人間中心的な、人間というものを非常に重視した立場、人間の理性を非常に尊重した立場があるということが言えると思います。

先ほどから、トマスは「アリストテレス哲学」を利

用したと言っているわけですが、トマスはアリストテレスの著作そのものに対しても非常に膨大かつ詳細な注解を書いています。『形而上学』『自然学』『ニコマコス倫理学』『政治学』といった主要著作に対する注解や、その他の著作に対するものもたくさんあります。『命題論』や『分析論後書』といった論理学的著作に対しては注解を書いています。このように、トマスは、アリストテレス哲学を、単にキリスト教との関わりにおいてだけではなく、それ自体として徹底的に理解しようとして努めています。

さらに、トマスの神学体系においても非常に重要な概念として、「可能態—現実態」、そして四原因というアリストテレスの哲学的概念があります。可能態——これはギリシア語では「デユナミス」(dynamis)、ラテン語では「ポテンティア」(potentia)です——、そして現実態——これはギリシア語では「エネルゲイア」(energeia)、ラテン語では「アクトゥス」(actus)です——という概念、それに加えて、四原因、すなわち質料因、形相因、作用因、目的因という概念がアリスト

テレス哲学の基本的な概念としてあるわけですが、そういうものがトマスの体系において決定的に重要な役割を果たしています。神論、創造論、キリスト論、恩寵論といった神学的議論においても、トマスはこれらのアリストテレスの哲学的概念を縦横無尽に駆使して自らの神学の体系を構築しています。

また、アリストテレスは、人間のすべての認識というのは感覚から始まるということを非常に強調するわけですから、つまり、人間の知性というものは、もともとは「タブラ・ラサ」(tabula rasa)——これは「拭かれた石板」という意味です——、すなわち白紙であると言っています。したがって、人間には、生得観念、つまり感覚経験に先立ってもっている観念があるわけではなく、人間はあくまで感覚によって得られた表象像から普遍的概念を抽象することを通して知識を得ていくとアリストテレスは言うわけですが、そのようなアリストテレス哲学の経験主義的な面をトマスは引き継いでいます。

新プラトン主義からの影響

このように、トマスはアリストテレスの哲学に非常に大きな影響を受けて自らの神学体系をつくったと言われているわけですが、その一方で、トマスはプラトン主義の影響も大きく受けていることが指摘されています。これは、正確に言うくとプラトン (Platon 前427ー347年) の哲学そのものというよりは、「新プラトン主義」という哲学思想です。当時のヨーロッパではプラトンの著作の多くは知られておらず、『メノン』『パイドン』『ティマイオス』と、『パルメニデス』の一部のみが知られていました。三世紀にプロティノス (Plotinos 205ー270年) という哲学者がいますが、トマスはこのプロティノスによって始められた新プラトン主義の影響を非常に大きく受けています。新プラトン主義には、「二者」——ギリシア語では「ト・ヘン」(to hen)——からの万物の流出と還帰という思想があります。万物はその一者から流れ出て、そして、それらはまた一者へと戻って行くわけです。そして、『神学大全』の体系全体の基本的な構造もそれと同じような体系を成

していると言われています。

また、当時アリストテレスの著作と考えられていた『原因論』という文書があります。この文書は中世ヨーロッパの思想に非常に大きな影響を与えたのですが、実はアリストテレスの著作ではなくて、五世紀の新プラトン主義の哲学者にプロクロス (Proklos 412ー485年) という人がいますが、この人の『神学綱要』という著作の抜粋をまとめたものです。そして、そのことを初めて指摘したのがトマスです。

トマス自身はギリシア語があまりできなかったのですが、主にモルベカ (ムールベケ) のグイレルムス (Guillelmus de Moerbeke 1215／35頃ー1286年頃) によるラテン語訳のテキストを使って研究をしたわけですが、それでも見抜いたということです。ですから、こういうふうに見てきますと、トマスはアリストテレス哲学中心ではあるわけですが、プラトン主義とアリストテレス哲学という古代の哲学の大きな二つの流れを総合しようとした思想家だという側面もあると言えるかと思えます。

トマス・アクィナス略年譜	
1224/25	アクィノ町近郊ロッカ・セッカ城で生まれる
1230/31	初等教育のためモンテ・カシーノのベネディクト会修道院に送られる
1239	ナポリ大学入学。
1244	ドミニコ会入会。その後パリに行き、アルベルトゥス・マグヌスのもとで学ぶ
1256	パリ大学神学部教授に就任
1259-68	イタリア遍歴時代。 『神学大全』を書き始める（1266年頃）
1269	再びパリ大学神学部教授に就任
1272	ナポリにドミニコ会神学大学を創設
1273	聖ニコラウスの祝日（12月6日）にすべての著作活動を停止
1274	没

福田良典『トマス＝アクィナス』（清水書院）所収の年譜に基づき作成

家族の反対に抗して、ドミニコ会へ

それではまず、トマス・アクィナスがどういう人かということですが、皆さんすでに御存じかとも思いますが、一応簡単な年譜を載せておきました。トマス・アクィナスは、十三世紀のイタリア出身の神学者・哲学者で、ドミニコ会というカトリックの修道会に所属

していた修道士であり、司祭でありました。

年譜を見ていただくと、アクィノという町の近くで生まれています。これは、ローマとナポリの大体中間ぐらいにある町ですが、その近くのロッカ・セッカ城というお城で生まれています。父親は騎士だったと言われています。このアクィノという町から「アクィナス」という名が取られていますので、これは苗字というわけではありません。「トマス・アクィナス」は「アクィノ出身のトマス」という意味です。

まずは、五歳か六歳で近くのモンテ・カシーノのベネディクト会修道院に入れられるわけですが、その後、ナポリ大学に入学し、そこで二十歳頃ドミニコ会に入会します。ドミニコ会というのは、正式には「説教者兄弟会」と言いますが、フランススコ会と並んで十三世紀の初めにできた修道会です。ベネディクト会のほうは、六世紀に創立された古い修道会です。ドミニコ会は、托鉢修道会と呼ばれる新しいタイプの修道会です。ベネディクト会は労働と祈りを中心として「働き、そして祈れ」という理念のもとにつくられた修道会です。

すが、ドミニコ会の方は、労働して祈るというよりは、民衆に説教することを使命としてつくられた修道会になります。ドミニクス (Dominicus 1170頃 - 1221年) という人がつくって、当時はカトリ派などの異端が非常に多くあったので、そういう人たちに説教して回心させるという目的でつくられた修道会です。ですから、労働をあまりしないわけです。そして、異端を論破するために学問に力を入れるわけです。人々の喜捨によって生活の糧を得るといふ修道会ですから、これまでにない新しいタイプの修道会です。

そうすると、トマスの家族はドミニコ会への入会に非常に反対したわけです。兄弟に連れ去られて、生まれた城の一室に一年ぐらい閉じ込められて説得を受けたと言われています。そのときに、家族は美女にトマスを誘惑させようとしたのですが、トマスは暖炉にあった火のついた薪で追い払って誘惑に負けなかったという伝説があります。その後、どうしてもトマスの意志が固いので家族も根負けしてドミニコ会に入会することを許したと言われています。その後は、パリ大学や

ケルンで同じドミニコ会会員のアルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus 1193 / 1200 - 1280年) の



ベラスケス作「聖トマスへの誘惑」(1632年、244×203cm)。トマスが追い払った女性がドアから逃げている。ひとりの天使がトマスを介抱し、別の天使は貞潔のシンボルである白いリボンを手に入れている。スペインのオリウエラ聖堂キリスト教美術館 (Museo Diocesano de Arte Sacro) 所蔵

もとで勉強し、パリ大学の神学部教授に二度なっています。二度もなった人はあまりいないわけで、おそらく、有名などころでは同じドミニコ会の神秘思想家であるエックハルト (Meister Eckhart 1260頃 - 1327/28年) が二度なっているくらいではないかと思えます。

『神学大全』を書き始めたのは、「イタリア遍歴時代」と呼ばれている、一度パリ大学教授を務めた後、イタリアの幾つかの場所を転々としている時期があります。その後の一、二六六年頃と考えられています。その後、またパリ大学教授に就任しています。

興味深いのは、最晩年にトマスは著作活動を停止してしまうことです。年譜を見ただくと五十歳にならないぐらいで亡くなっていますが、一二七四年の死の前年の十二月六日の「聖ニコラウスの祝日」に、ミサを挙げた後ですべての著作活動を停止してしまいます。その後、三カ月ぐらいで没してしまいます。ですから、『神学大全』は実は未完の著作です。『神学大全』は非常に大きな体系的著作ですが、それが未完の書であるというのは非常に興味深いことだと思います。

この著作活動を停止した出来事については、日本のトマス・アクィナス研究の権威であると言つてよい方だと思えますが、九州大学名誉教授の稲垣良典先生が、清水書院の「人と思想」のシリーズの『トマス＝アクィナス』に非常に印象的な文章で描いておられますので、その部分を読んでみたいと思います。

一二七三年二月六日、聖ニコラウスの祝日は水曜日にあたっていたが、この日の朝、トマスはいつものように聖ニコラウス礼拝堂でミサを捧げた。しかし、ミサの間に「不思議な変化を被^{こうむ}つた」(カプアのパルトロメウスの証言)、このミサの後、トマスは書くことも口述することもいっさい止めてしまった。いなくなつてしまったのである。この頃、トマスはキリストの聖体の秘跡についての論考(『神学大全』第三部第七三―八三問題)を書き終えて、悔悛の秘跡に取りかかっていたが、第九〇問第四項をもつて永久に筆をおいた。僚友のレギナルドウスは驚いて、著作を続行するように

しきりにすすめたが、トマスはただ、私にはできない、とくりかえすだけであつた。そして最後に「レギナルドゥス、私にはできない——私がこれまで書いたものはすべてわらくずのように見えるからだ」と答えたという。

(一八九—一九〇頁)

トマスはミサを捧げたときに、何か神秘的な体験をしたのだらうと言われているわけです。トマスは非常に体系的な著作を書いたわけですが、最後は「これまで書いてきたものは、わらくずのように見える」と言つて止めてしまった。この出来事が何を意味しているのかということは、非常に考えなければいけないことであるように思います。トマスは非常に体系的で理性的・合理的な人であつたわけですが、このように、ただ合理的な人だつたと割り切ることができない部分もあります。

『神学大全』の目的——初学者のための神学入門書

次に、『神学大全』の構成と目的についてです。先ほ

ど申しましたように、これは日本語訳でも全四十五巻、実際には複数の巻が合冊になっているところもあるので、実質的には三十九冊ですが、非常に大きな著作です。

『神学大全』という著作は、まず基本的な構成要素として「問題」(questio)が立てられ、それぞれの問題の中に「項」(articulus)という小さなテーマの単位があります。第何問題、第何項と言ったりするわけです。そういう問いを立てて論じていくというスタイルで、『神学大全』は全体で五百十二の問題と、二千六百六十九の項がその中にあるという非常に大きなものになっています。この『神学大全』の序言、これは非常に短いもので日本語訳でも一ページ、ラテン語原典だと半ページにもならないというきわめて短いものです。ですから、まず全体を読んでみたいと思います。

公教的真理の教授の位置にある者は、学の進んだひとびとを教える務めを有するにとどまらない。さらに初学者たちを教導することもまた、その任

務に属しているのであって、それはあたかも使徒の、『私はあなたがたをキリストにおける小児と考え、乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。』という『コリント人への第一書翰』第三章（第一節）の言のごとくでなくてはならぬ。いま、この著作における我々の意図するところのねらいも、キリスト教に属する諸般のことがらを、まさしく初学者たちの教導に適応するところに従って伝えるにある。

けだし我々は、この教えの入門者たちが、さまざまなひとびとの手に成るこれまでの諸著作において、非常な障害を被っていることに注目せざるをえなかったのであって、それはすなわち、一つには、こうした諸著作における無益な問題・項・論議の重積のゆえであり、さらに一つには、こうしたひとびとの必ず知っておくべきことがらが学問の秩序に従って伝えられず、却って諸書の解説の仕事の要求するがままに、或いは討論の機会の到来するがままに与えられて来たからであり、い

ま一つにはまた、その際同じことがらの頻繁な反覆が読者の心のうちに倦怠と混乱とを生むを常とするからであった。

我々は、それゆえ、これらの乃至はこれに類する欠陥を避ける工夫に努めたい。そして聖教に属する諸般のことがらを題材の許すかぎりの簡潔かつ明晰な仕方ですべて追求するという仕事を、神助に信頼しつつ試みたいと思う。

『神学大全』序言（創文社版、第一分冊、一―二頁、

傍点筆者）

これが、序言の全体です。これを読むと、驚くべきことですが、この『神学大全』という分量的にもきわめて大きな著作は「初学者のための入門書」だったということで、この膨大かつ難解な著作のどこが入門書なのか、あるいは、「初学者」とは何を意味するのか、ということが、いろいろ論じられたりもしています。

またトマスは、「学問の秩序」ということを強く意識しています。つまり、どのように神学が学問として構

第一部 神

第二部 人間の神への運動

第一 創造

- 三位一体
 - 父・子・聖霊
- 被造物の神からの発出・起原
- 被造物の神からの発出・恵の問題
- 被造物の区別
 - 天使
 - 物体
 - 人間
- 被造物の保存と統掌

第二 神の至福

- 神のはたらき
 - 神の生命
 - 神の意志
 - 愛・正義と憐れみ (意志のみに関わること)
 - 摂理・予定・生命の書 (意志と知性に関わること)
- 知性
 - 神の知
 - イデア・真・偽

第二・二部 一般倫理

- 究極目的と至福
- 人間のはたらき
 - 意志的行為
 - 行為の善悪
 - 情念
 - 習性・徳・罪
 - 法
 - 恩恵

第三部 神に向かうための道なるキリスト

- 御言の受肉
- キリストの誕生
- 秘跡
 - 洗礼
 - 告解
 - 聖体・告解
 - 堅信 (つづき)
 - 終油・叙階・婚姻
 - 補遺
 - 終末
 - 復活と審判

第二・一部 特殊倫理

- 対神徳
 - 信仰・希望・愛
 - 叔要徳
 - 賢明・正義・剛毅・節制
- 特別の恩恵
 - 預言・脱魂・奇跡等
- 観想的生活と活動的生活
- 司牧者の身分と修道者の身分

第二 人間

- 第一 一五 問
- 第二 一七 問
- 第三 一八 問
- 第四 二四 問
- 第五 二八 問
- 第六 二九 問
- 第七 三〇 問
- 第八 三二 問
- 第九 三三 問
- 第十 三三 問
- 第十一 三三 問
- 第十二 三三 問
- 第十三 三三 問
- 第十四 三三 問
- 第十五 三三 問
- 第十六 三三 問
- 第十七 三三 問
- 第十八 三三 問
- 第十九 三三 問
- 第二十 三三 問
- 第二十一 三三 問
- 第二十二 三三 問
- 第二十三 三三 問
- 第二十四 三三 問
- 第二十五 三三 問
- 第二十六 三三 問
- 第二十七 三三 問
- 第二十八 三三 問
- 第二十九 三三 問
- 第三十 三三 問
- 第三十一 三三 問
- 第三十二 三三 問
- 第三十三 三三 問
- 第三十四 三三 問
- 第三十五 三三 問
- 第三十六 三三 問
- 第三十七 三三 問
- 第三十八 三三 問
- 第三十九 三三 問
- 第四十 三三 問
- 第四十一 三三 問
- 第四十二 三三 問
- 第四十三 三三 問
- 第四十四 三三 問
- 第四十五 三三 問
- 第四十六 三三 問
- 第四十七 三三 問
- 第四十八 三三 問
- 第四十九 三三 問
- 第五十 三三 問
- 第五十一 三三 問
- 第五十二 三三 問
- 第五十三 三三 問
- 第五十四 三三 問
- 第五十五 三三 問
- 第五十六 三三 問
- 第五十七 三三 問
- 第五十八 三三 問
- 第五十九 三三 問
- 第六十 三三 問
- 第六十一 三三 問
- 第六十二 三三 問
- 第六十三 三三 問
- 第六十四 三三 問
- 第六十五 三三 問
- 第六十六 三三 問
- 第六十七 三三 問
- 第六十八 三三 問
- 第六十九 三三 問
- 第七十 三三 問
- 第七十一 三三 問
- 第七十二 三三 問
- 第七十三 三三 問
- 第七十四 三三 問
- 第七十五 三三 問
- 第七十六 三三 問
- 第七十七 三三 問
- 第七十八 三三 問
- 第七十九 三三 問
- 第八十 三三 問
- 第八十一 三三 問
- 第八十二 三三 問
- 第八十三 三三 問
- 第八十四 三三 問
- 第八十五 三三 問
- 第八十六 三三 問
- 第八十七 三三 問
- 第八十八 三三 問
- 第八十九 三三 問
- 第九十 三三 問
- 第九十一 三三 問
- 第九十二 三三 問
- 第九十三 三三 問
- 第九十四 三三 問
- 第九十五 三三 問
- 第九十六 三三 問
- 第九十七 三三 問
- 第九十八 三三 問
- 第九十九 三三 問
- 第一百 三三 問

第三 人間

- 第一 一五 問
- 第二 一七 問
- 第三 一八 問
- 第四 二四 問
- 第五 二八 問
- 第六 二九 問
- 第七 三〇 問
- 第八 三二 問
- 第九 三三 問
- 第十 三三 問
- 第十一 三三 問
- 第十二 三三 問
- 第十三 三三 問
- 第十四 三三 問
- 第十五 三三 問
- 第十六 三三 問
- 第十七 三三 問
- 第十八 三三 問
- 第十九 三三 問
- 第二十 三三 問
- 第二十一 三三 問
- 第二十二 三三 問
- 第二十三 三三 問
- 第二十四 三三 問
- 第二十五 三三 問
- 第二十六 三三 問
- 第二十七 三三 問
- 第二十八 三三 問
- 第二十九 三三 問
- 第三十 三三 問
- 第三十一 三三 問
- 第三十二 三三 問
- 第三十三 三三 問
- 第三十四 三三 問
- 第三十五 三三 問
- 第三十六 三三 問
- 第三十七 三三 問
- 第三十八 三三 問
- 第三十九 三三 問
- 第四十 三三 問
- 第四十一 三三 問
- 第四十二 三三 問
- 第四十三 三三 問
- 第四十四 三三 問
- 第四十五 三三 問
- 第四十六 三三 問
- 第四十七 三三 問
- 第四十八 三三 問
- 第四十九 三三 問
- 第五十 三三 問
- 第五十一 三三 問
- 第五十二 三三 問
- 第五十三 三三 問
- 第五十四 三三 問
- 第五十五 三三 問
- 第五十六 三三 問
- 第五十七 三三 問
- 第五十八 三三 問
- 第五十九 三三 問
- 第六十 三三 問
- 第六十一 三三 問
- 第六十二 三三 問
- 第六十三 三三 問
- 第六十四 三三 問
- 第六十五 三三 問
- 第六十六 三三 問
- 第六十七 三三 問
- 第六十八 三三 問
- 第六十九 三三 問
- 第七十 三三 問
- 第七十一 三三 問
- 第七十二 三三 問
- 第七十三 三三 問
- 第七十四 三三 問
- 第七十五 三三 問
- 第七十六 三三 問
- 第七十七 三三 問
- 第七十八 三三 問
- 第七十九 三三 問
- 第八十 三三 問
- 第八十一 三三 問
- 第八十二 三三 問
- 第八十三 三三 問
- 第八十四 三三 問
- 第八十五 三三 問
- 第八十六 三三 問
- 第八十七 三三 問
- 第八十八 三三 問
- 第八十九 三三 問
- 第九十 三三 問
- 第九十一 三三 問
- 第九十二 三三 問
- 第九十三 三三 問
- 第九十四 三三 問
- 第九十五 三三 問
- 第九十六 三三 問
- 第九十七 三三 問
- 第九十八 三三 問
- 第九十九 三三 問
- 第一百 三三 問

も、一つ指摘できるのは、我々は通常「神学」という言葉を使い、そして『神学大全』という題名の著作であるわけですが、ここでトマスは「聖教」という言葉を使っていることです。「聖なる教え」「ラテン語では「サクラ・ドクトリーナ」(sacra doctrina)です。ですから、「神学」とは言っていないという点は注目すべきことで、通常「神学」と訳されるギリシア語・ラテン語の「テオロギア」(theologia)ではなくて、トマスは自らの体系を「聖教」という名で呼んでいます。

円環的体系——「神からの発出」

「神への還帰」「その道であるキリスト」

さて、次にお話したいのは、『神学大全』は全体として円環的体系をなしているということです。お配りしたのは京都大学等の教授をなされた山田晶先生の『神学大全』の翻訳の解説に載っている表です（前頁を参照）。

これは、『神学大全』第一部の最初の部分の翻訳で、中央公論社の「世界の名著」シリーズで刊行されたものですが、現在では「中公クラシックス」のシリーズの二巻本で復刊されています。

『神学大全』全体は、「第一部」「第二部」「第三部」という三つの部分から成っています。まず、「神について」というのが第一部です。最初に、第一問題で聖教がどのような学問であるかを論じていますが、その後、神の存在、神の本質とはたらく、三位一体、そして、神からの被造物の創造とその保存・統率といったテーマを論じています。次に、「人間の神への運動」という、理性的被造物である人間についての考察が第二部です。倫理的、人間論的考察と言ってよいかと思えます。そ

して、第三部が、「神に向かうための道なるキリスト」となっています。神から被造物がどのように創造され、そして、理性的被造物である人間がどのように神へと立ち戻っていくか。そのためには、人となった神であるキリストが不可欠であるという構造になっています。

『神学大全』の1482年の活字本から。ヴェニス印刷業者アントニオ・デ・ストラータの印行によるもの。「インキユナブラ」と呼ばれるヨーロッパ初期の活字印刷物のひとつである



この全体の構造をトマス自身が簡潔にまとめていますので、それを読んでみたいと思います。

さて、既述によって明らかなごとく、この聖教の主要な意図は神についての認識を伝えるにあり、それも然し、単にそれ自身においてあるかぎりにおける神にとどまらず、更にまた、諸々の事物の、そして特に理性を有する被造物（『人間…筆者注』の、根源でありかつその究極（『目的…筆者注』でもあるかぎりにおける神についてであるがゆえに、こうした教えの解説をこころざす我々としても、やはり、以下において、第一に「神について」（第一部）、第二には「理性的被造物の神への運動について」（第二部）、第三には「キリスト——即ち、人間でありたもうかぎりにおいて、我々にとつての、神に赴くための道なる——について」（第三部）、論ずることになるであろう。

『神学大全』第一部、第二問題、序言（創文社版、
第一分冊、三四頁）

このように、『神学大全』の全体の構成は、万物の「神からの発出と還帰」という構造になっています。キリスト教の教えでは、被造物は神の自由な意志によって創造されたということになっていますので、その点では、必然的なものと考えられている新プラトン主義における一者からの発出・流出とはちよつと違いがあります。しかし、全体の構造としては新プラトン主義的な発出と還帰、流出と還帰という構図を採用していると言えるわけです。

山田先生の表を見ていただくと、もう一つ指摘できることは、問題の数という点では、第二部の神学的人間論、倫理学の分量が圧倒的に大きいということです。第一部は百十九問題です。これに対して、第二部は、一般倫理を扱う「第二・一部」と特殊倫理を扱う「第二・二部」と二つの部分に分かれています。人間について論じているこの第二部が全体で三百三問題からなっています。そして、キリストについて論じられている第三部が九十問題となっていますので、第二部が他の二つの部それぞれの三倍くらいの分量があるとい

うことです。ですから、トマスは人間存在のあり方に非常に大きな関心をもっていたということが言えるかと思っています。

キリスト教では、人間は「神の像」——ラテン語では「イマゴ・デイ」(imago Dei)です——であると考えますが、トマスは、人間が神の像であるのは、知性と自由な意志をもち、主体的な決定ができるという意味においてであると考えています。トマスは、人間は「自己の行為の主」であると言っています(『神学大全』第二・一部、第一問題、第一項(創文社版、第九分冊、五頁)を参照)。「主」というのは、ラテン語では「ドミヌス」(dominus)で、「主人」ということです。この表現からは、トマスが行為者としての人間の自立性を重視していたことが読み取れるように思います。

2 啓示神学としての「聖教」

「信仰による啓示」を「理性的に理解」

次に、「啓示神学としての聖教」というところに入っていきますが、なぜトマスは「聖教」という言葉を使

ったのかという問題があります。まず、キリスト教の神学の一般的な定義として、『岩波キリスト教辞典』の「神学」という項目で百瀬文晃先生は、「キリスト教において神学とは、信仰によって受け止められた啓示の内容を理論的に理解し、表現する営みである」と書かれています。百瀬先生はイエズス会の司祭で上智大学神学部の教授をされていた方ですから、カトリック的に見ても妥当な解説と言えるかと思っています。

この定義の中には、「信仰」と「啓示」という二つの要素があります。つまり、神学では、神からの啓示の内容を信仰によって受け止めるということが前提とされています。そして、その内容に対する理性による理論的理解の営みが神学であるということです。「神学」という言葉は英語ではtheologyで、その語源となっているギリシア語・ラテン語では「テオロギア」(theologia)です。ギリシア語で「テオス」(theos)は「神」です。そして、「ロゴス」(logos)は「言葉・語り」ですから、神学は、語源的には「神についての言葉」「神についての語り」という意味であると言えます。

この「神学」という言葉、これを現在普通に「キリスト教神学」と言う場合の意味で、つまり信仰によって信じられたことがらについての論証的学問という意味で最初に使ったのは、十二世紀フランスの神学者・哲学者であるペトルス・アベラルドウス (Petrus Abaelardus 1079 - 1142年) —— フランス語ではピエール・アベラル (Pierre Abélard) です —— であると言われています。

このような神学の意味というのは、信仰によって受け取られたことについての知解・理解——これは知性的認識と言われることもあります——ということですが、それをよく表している言葉として、最初のスコラ学者とも呼ばれるアンセルムスの「知解を求める信仰」 (fides quaerens intellectum) という言葉があります。あるいは、この言葉はスコラ学の理念を表していると言われることもあります。あるいは、さかのぼっては、この言葉は、「知解するために信ぜよ」というアウグスティヌスの言葉が元になっているとも言われます。

「聖教」は人間に必要な「学」

さて、トマスは『神学大全』での自らの神学を「聖教」と呼んだわけですが、その『神学大全』第一部の第一問題で、聖教がどのようなものであるかを論じています。その第一問題「聖なる教えについて」の序言を挙げておきました。ここでトマスは、このテーマをさらに十個の項に分けています。

我々の意図に一定の明確な境界をかぎるため、我々はまず、聖教それ自身について、それがどのような性質のものであるか、またその及ぶところ如何、を考察する必要がある。

こうした点をめぐって十のことがらが問題となる。

第一 この教えの必要について

第二 それは学であるか

第三 それは単一な学か、それとも幾つかの学か

第四 それは観照の学であるか、それとも実践の

学であるか

第五 それの他の諸学との比較について

第六 それは智慧であるか

第七 それの主題は何か

第八 それは論議を行う性質のものか

第九 比喩的乃至は象徴的な語りかたの可否について

第十 この教えの基づく聖書は、幾つかの意味に従って解釈さるべきであるか

『神学大全』第一部、第一問題、序言（創文社版、第一分冊、三―四頁）

ていることは、非常に特徴的なことであると思います。

「救済」には理性を超えた啓示が要る

さて、この中の第一項の「この教えの必要について」というところでトマスは、なぜ聖教というものが必要なのかを論じています。トマスは、「人間救済のためには、人間理性を以て探求されるところの哲学的諸学問のほかに、なお神の啓示に基づく或る種の教えの存することが必要であった。そのゆえは第一に、人間は神を自己の或る目的として、これに向って秩序づけられているものなのであるが、この目的たるや、理性の把握を超えている」（『神学大全』第一部、第一問題、第一項（創文社版、第一分冊、五頁））と述べています。

これを見ていただくと、トマスは「聖教は学である」ということを非常に強調していることがわかります。「学」というのはラテン語で「スキエンティア」(scientia)、英語では science で、学問だというわけです。「学」とは何かというと、論証的なもの、論証によって得られた確実な知・知識が学であると言えるかと思いますが、トマスは聖教というものを「学」として捉えていた。そのような学が人間にとって必要なものであると言っ

さらに続けてトマスは、「だが、人間は自己の意図や行為を目的に向って、みずから秩序づけなくてはならないのであるから、目的は彼らにとってあらかじめ知られていることを要する。かくて、人間理性を超えた或る種のごとが、神の啓示を通じて人間に知らされるということが、人間にとってその救済のために必

要であった」(同)と述べています。

ですから、人間は神を目的としていて、知性による「神の直視」(visio Dei)という仕方では神へと全面的に到達することが人間の救済となるとトマスは考えているのですが、そのために「自己の行為の主」である人間は自らの主体的な意図や行為によって神へと自らを秩序づけなければならないわけです。ただ、神はそれ自体としては人間理性の把握を超えているので、それについての知識が啓示によって与えられる必要があったとトマスは考えています。つまり、人間の救済のためには、単なる理性を超えた聖教というものが必要であったというわけです。ですから、トマスにとって聖教は「人間のための神学」であるということが言えるのではないかと思います。

哲学的「自然神学」とは異なる「啓示神学」聖教

さてトマスは、「聖教の主題は何か」というと、それは「神である」と言います。『神学大全』の中では、神だけでなく人間などについても論じたりしますが、

あくまで主題は神だというわけです。「神がこの学の主題である。……いま、聖教においてはすべてが「神」の観点のもとに取扱われる。ことがらが神それ自身であるからにしても、乃至はまた、それが始源ならびに究極(「目的」筆者注)としての神への秩序を含むところのものであるからにしても——」(『神学大全』第一部、第一問題、第七項(創文社版、第一分冊、二〇—二二頁))と述べられています。

それではなぜ、トマスが「神学」と言わずに「聖教」という言葉を用いたのかということですが、おそらくその理由としては、「自然神学」というものと「啓示神学」というものを区別しようとしたということが言えるだろうと思います。

「神学」という言葉は、もともと「神についての語り」という意味ですので、人間理性によっても神について語ることができるという考え方もあるわけです。そのような、神に関する哲学的理論を「自然神学」と言います。さらに、それだけではなくて、啓示によって明らかにされた「神についての語り」もあるわけで

す。「神学」という言葉はどちらも含むとトマスはおそらく考えていて、人間の救済には人間の理性を超えた啓示が必要だという意味で、自らの神学を「聖教」という言葉で表現したと言えるのではないかと思います。

トマスはこう言っています。「だからして、哲学的諸学問においては、或ることがらが、自然的理性の光によって認識されるものたるかぎりにおいて取扱われ、それとともに、またその同じことがらが、別個の学においては、神的な啓示の光によって認識されるものたるかぎりにおいて取扱われるということに、何の妨げもない。それゆえ、聖教に属するところの「神学」は、哲学の一部門とされるところのかの「神学」とは、類を異にするものなのである」(『神学大全』第一部、第一問題、第一項(創文社版、第一分冊、六―七頁))。

ですから、聖教に属する神学は、人間理性によって遂行される哲学としての神学とは区別されるということです、トマスは「聖教」と呼んでいると言えるわけです。

3 啓示神学の前提としての「信仰」

次に、「啓示神学の前提としての信仰」ということについてお話をします。トマスは、信仰の必要性について、「人間の認識以上の高次のことがらは、人間は、理性によってこれを探求すべきではない。我々は却って、それらが神によって啓示されているところを信仰によって受容するのでなくてはならない」(同(創文社版、第一分冊、六頁))と述べています。

信すべき啓示は「聖書にのみ」示されている

そうしますと、次に何を信じるかという問題があるわけです。それは、啓示されたことを信じるということです。その啓示は聖書に示されているわけですが、トマスは次のように語っています。

固有の意味における権威としては、それ(「聖教…筆者注」)はやはり聖書正典の諸権威を用いるのである
って、論議はここでは動かし難い必然性に基づい

て行われる。……まことに、我々の信仰は、正典の諸書の作者たる使徒や予言者たちの受けた啓示に依拠するものにほかならないのであって、彼らを除いては、たとえこれら教会の師たちが何らかの啓示を受けるところがあつたにしても、こうした啓示にそれは依拠するものではない。

〔『神学大全』第一部、第一問題、第八項（創文社版、第一分冊、二五―二六頁）〕

ここでトマスは、啓示の固有の権威としては聖書正典を用いると言っています。聖書の著者である使徒や預言者たちの受けた啓示というのが、聖教の基盤となる権威である。教会の他の人たち、教父とか他の聖人といった人たちに、何か神から啓示が与えられることがあつても、我々はそれに依拠するのではなくて、あくまでも聖書が中心であると述べています。

通常、カトリック教会とプロテスタント教会の違いとして、プロテスタント教会では「聖書のみ」(sola scriptura)を主張していると言われるのに対して、カト

リック教会は「聖書と聖伝」の両方を重視するということが言われます。「聖伝」は、「聖なる伝承」「聖なる伝統」ということですが、これは教会の中で伝えられているわけです。こういうことがよく言われていて、実際にそうとも言えるのですが、トマスがあくまで聖書に基づかなければならないということを強調しているという点では、「聖書のみ」というプロテスタントの理念と大きな違いはないとも言えるわけです。

「信仰の真理」の要約としての「信仰箇条」

ただ、聖書に書かれていることというのは非常に広いわけです。聖書は本としてもかなり分厚いものになるわけで、トマス自身、そこから何を信じるべきかをまとめなければならぬと言っています。「信仰の真理は聖書において散らばった仕方、また多様な、そして或る場合にはわかり難い仕方で見出される。……したがって聖書の諸々の教えのなかから、万人にたいして信すべきこととして提示されうるような、或る明白なことがらを要約的に集成することが必要であつた」

『神学大全』第二・二部、第一問題、第九項（創文社版、第十五分冊、四二頁）。そのような要約をトマスは「信仰簡条」と呼んでいます。そういうものが必要だというわけです。トマスは、「聖教は、神によって自己に啓示された諸々の基本命題を信じるのである」（『神学大全』第一部、第一問題、第二項（創文社版、第一分冊、八頁））と言っていて、この「諸々の基本命題」が「信仰簡条」と呼ばれているものです。

では、信仰簡条は具体的にどのようなものかという点、それは教会の歴史の中で「信条」(symbolum)というかたちでまとめられています。信条とされるものは、キリスト教の教会の歴史の中でいろいろなものがありますが、トマスは「すべての信経（『信条』筆者注）において同じ信仰の真理が教示されている」（『神学大全』第二・二部、第一問題、第九項（創文社版、第十五分冊、四二頁））と言っています。そのような信条の例としては、三二五年に、第一ニカイア公会議で制定された「ニカイア信条」——そこでは父と子が同一本質であると述べられています——、さらにそれが三八一年の第一コ

ンスタンティノポリス公会議で拡充された「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」があり、これが代表的な信条であるとされています。

クラシックのミサ曲に「クレド」(Credo)という部分がありますが、そこに載せられているのは、このニカイア・コンスタンティノポリス信条です。あと有名な信条としては、カルケドン公会議によって定められた「カルケドン信条」があります。ここでは、キリストが神性と人性という二つの本性をともにつと述べられています。

そういった重要な信条があるわけですが、それとともに西方教会——これは東方教会に対しての呼称で、ローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会をまとめて西方教会と言います——に古くから伝えられていて、ニカイア・コンスタンティノポリス信条と並んで代表的なものとされている信条として「使徒信条」と呼ばれる簡潔な信条があります。ここではそれを挙げてみます。

天地の創造主、全能の父である神を信じます。

父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、陰府よみに下り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。

(カトリック中央協議会ホームページより)

諸真理を成り立たせる「第一真理」たる神

それでは、キリスト教の信仰というのは信仰箇条という教義命題を信じることになるのかと思われるかもしれません。もちろん、そういう面はあるわけですが、その一方でトマスは、信仰というのは「第一真理」を信じることであるということを強調しています。

したがって、信仰に関していえば、もしわれわれが対象の形相的（『本質的…筆者注』根拠を考察するならば、それは第一の真理にほかならない。というのも、われわれがここで語っている信仰は何事にたいしても、それが神によって啓示されたものであるという理由によるのでなければ、承認を与えることはないからである。……これにたいして、信仰がそれらにたいして承認を与えるところのこととがらが質料的（『内容的…筆者注』に考察されるならば、それはたんに神自身だけではなく、他の多くのことがらをもふくんでいる。しかし、それらのことがらは、神にたいして何らかの関係をもつかぎりにおいて——つまり、神の何らかの働きかけの結果として人間が神において悦び憩うことへとむかうように扶助されるかぎりにおいて——でなければ信仰の承認の下に入ってくることはない。このようなわけで、この側面からしても信仰の対象は或る意味で第一の真理なのであって、それは神への関係においてでなければ何事も信仰の下に

入ってくることはないかぎりにおいてである。

『神学大全』第二・二部、第一問題、第一項（創文社版、

第十五分冊、八頁）

つまり、先ほど信条の例として「使徒信条」を挙げましたが、その中には、おとめマリヤやポンティオ・ピラトといった、神そのものとは違うものがあるいろいろ入ってきているわけです。そういったことがらについてもキリスト教の信仰は信じるわけですが、それはあくまで第一真理である神との関係のもとで、第一真理のゆえに信じるのだ、ということをとマスは言っています。ですから、あくまで信仰の対象というのは本来的には第一真理であるとされるわけです。

真理というのは真なる認識、たとえば「 $1+1=2$ 」

は真であると我々は言うわけですが、そういったときの「真であること」という意味での真理です。トマスは、その真理ということをも、知性認識における「事物と知性の合致」として理解しているのですが、そのような真理は複数あって、論理的真理や、数学的真理や、科

学的真理や、実践的真理など、さまざまな知性認識に
応じて、いろいろな真理がある。そのいろいろな「真
であること」のすべてを成り立たせているのが「第一
真理」です。すべての諸真理を成り立たせているもの
が第一真理と言われます。それが神である。そして、
それを信じるのが信仰であると言っているわけです。

第一真理への信仰に含まれる「暗黙的キリスト信仰」

さらに、「暗黙的な信仰」ということをトマスは論じて
います。ここは非常に面白い箇所ではないかと思
います。キリスト教には信仰箇条がいろいろあるわけ
ですが、それが暗黙的にはただ一つのものの中に含まれ
ているということを言っています。

これと同様に、『ヘブル人への書翰』第十一章（第
六節）において「神に近づく者は、神が存在し、ご
自分を求める者たちに報いてくださる方であるこ
とを信じていなければならない」とのべられてい
るところにもとづいて、すべての信仰箇条は或る

第一の信すべきことがら、すなわち神が存在し、摂理をもつて人間の救済を配慮することを信すべきだ、ということのうちに暗黙的にふくまれているのである。……そしてこのような仕方で、他の（これら第一の信仰箇条の）後にくる諸信条のうち、さらに或るものは他のもののうちにふくまれているのであって、たとえば人間の救済についての信仰のうちに、暗黙的にキリストの托身とかれの受難、およびすべてこの種のことながらふくまれているのである。

『神学大全』第二・二部、第一問題、第七項（創文社版、

第十五分冊、三〇頁）

つまり、第一真理である神が存在し、そして摂理、配慮をもつて人間の救済を配慮しているということを信じていれば、たとえ歴史的存在としてのイエス・キリストに対する明示的な信仰をもっていないとしても、その第一真理への信仰の内にキリストについての信仰も暗黙的に入っている。というのも、キリストはあく

まで人間を救済するために父なる神が送ったわけですから、そこにはキリストへの信仰が暗黙的に含まれているのだ、ということをトマスは言っています。

キリストへの「明示的信仰」なき者も救われる？

さらにそこから、トマスは、啓示を受けなかった人々が救われる可能性にも言及しています。

しかしながら、もし啓示を受けなかった人々が救われるということがあったとしても、かれらは仲介者（キリスト）にたいする信仰なしに救われたのではない。なぜなら、たとえかれらが明示的な信仰をもっていなかったとしても、かれらは神がその御心になかう仕方、また『ヨブ記』第三十五章（第十一節）に「かれは地の獣よりもむしろ私たちに教える」とあるように、神自らが真理を知っているところの或る人々に啓示したところにしたがつて、神は人々を救う者であることを信じているかぎりにおいて、神的摂理にたいする暗黙的な

信仰を有していたからである。

『神学大全』第二・二部、第二問題、第七項〔創文社版、

第十五分冊、七七頁）

キリスト教信仰の立場から言うと、神による人間の救いは、神でありながら受肉によって人間の本性をもった、人間となった神である、歴史的存在としてのイエス・キリストを通して与えられるわけです。そして、人間の救いがイエス・キリストを通して決定的に与えられたということは、キリスト教信仰の立場からは決して譲れないことであると言えるわけです。すべての人は必ずキリストを通して救われるということ、つまりある人間が救われるのであれば、それはキリストを通してでなければならぬということは、おそらく、キリスト教であるかぎりには譲れないことだと思いますが、ここでトマスは、暗黙的な信仰によって救われるということがあっても、それはキリストに対する信仰によって救われるのだということを理論的に述べているのではないかと思います。

二十世紀最大のカトリック神学者であると言われるカール・ラーナー（Karl Rahner 1904 - 1984年）が、「無名のキリスト者」（Anonyme Christen）という概念を提唱していて、キリスト教以外の信仰者の中にも、「無名のキリスト者」と呼ぶべき人々がいて、彼らはキリストを通しての救いに参与しているということを言っています。それに近いようなことを、すでに十三世紀のトマスが言っているのです。暗黙的にはそう取ることができるわけですが、少なくとも理論的にはそう取ることができるわけで、非常に興味深いことであると思います。

「信仰の大きさ」を「知性」と「意志」から測る

ところで、トマスは信仰を「徳」として理解しています。そして、徳としての信仰は、神自身を対象とする徳（対神徳）の一つであるとしています。対神徳には信仰、希望、愛徳の三つがあります。トマスは、アリストテレスに従って、徳を人間の習慣、それも善き行為の習慣として理解していますが、さらに、自然本性的な徳についてのみ語るアリストテレスを越えて、信

仰などの対神徳は、人間が自らの努力によって得られるものではなく、恩寵によって神から与えられるものであると言っています。

さてトマスは、そのような徳としての信仰の「大きさ」ということについて次のように語っています。

前述のごとく、習慣の量は二つの仕方では考察されることが可能である。その一つは対象の側からであり、もう一つは基体による分有に、即してである。……しかし、質料的に信すべきことがらとして提示されているものは多数あり、それらはより明示的に、あるいはより少く明示的に受容されることが可能である。ここからして、一人の人間が他の人間よりもより多くのことがらを明示的に信じるということが可能である。このように、信仰のより大いなる明示という観点から、一人の人間においてより大きな信仰が見出されることが可能である。

他方、もし信仰が基体による分有ということに

即して考察されるならば、このことは二つの仕方では起りうる。というのも、信仰の行為は前述のように、知性と意志とから出てくるものだからである。それゆえに、信仰は一つの仕方では知性の側から、より大いなる確実性とゆるぎなさのゆえに、より大いなるものと言われることができ、もう一つの仕方では意志の側から、より大いなる迅速さ、熱意あるいは確信のゆえに、より大いなるものと言われることが可能である。

〔神学大全 第二・二部、第五問題、第四項（創文社版、第十五分冊、一四四―五頁）、傍点筆者〕

ここでトマスは「習慣の量」と言っていますが、これは「善き行為の習慣」という意味での徳について語られる量ということです。これには二つの観点がある。それは、「対象の側」という観点と、もう一つ、「基体による分有」という観点であると言っています。ここで「分有」という言葉が出てきますが、「分有」というのはプラトン哲学の用語で、もとのギリシア語で

は「共通にもつこと」を意味する「メテクシス」(methexis)、ラテン語では「分けもつこと」を意味する「パルティキパティオ」(participatio)です。プラトン哲学では、現象界に存在する諸事物はイデアを分有することによってイデアの性質をある程度もつことができると考えられています。たとえば、個々の美しいものは、美そのものである美のイデアを分有する(分けもつ)ことによってある程度美しいものとして存在している、というように分有という概念が用いられています。

このテキストで、トマスは信仰の「大きさ」について二つの観点があると言っています。第一に、「対象の側から」という観点ですが、質料的に信すべきことから、これは内容的にという意味ですが、信すべきこととして提示される複数のことがらがあつて、そして、「より明示的に」あるいは「より少なく明示的に」受容されるということが考えられる。そういう対象の側から言くと、明示的に信じているほうがやはり大きな信仰であると言えるわけです。つまり、明示的にキリスト教の信仰簡条を信じている人のほうが、暗黙的に信じ

ているよりも、より大きな程度で信じている。そのような意味で、より大きな信仰がある。信仰のより大いなる明示性という観点からは、一人の人間において、他の人間よりも大きな信仰が見出されることが可能である。これが一つの観点としてあるわけですが、もう一つ別の観点があるわけです。

それは、第二の「基体による分有に即して」という観点です。基体というのは「もつ主体」「受け取る主体」という意味での基体です。つまり信仰という徳を分有する個々の人間のことです。その個々の人間によって分有された信仰という徳によって、「信じる」という信仰の行為がなされるわけですが、その信仰の行為、「信じる」という行為は知性と意志から出てきます。トマスは、「信じる」という行為を「承認とともに思いめぐらす」こととして定義しています。つまり、「信じる」という行為は、理性のみによってなされるのではなく、意志による承認、それが真であるという承認とともに理性によって思いめぐらすことという、理性と意志による共同作業であると考えています(『神学大全』第二・

二部、第二問題、第一項〔創文社版、第十五分冊、五〇―五三頁〕を参照。

したがって、信仰は、一つの仕方では「知性の側」から、「より大いなる確実性とゆるぎなさのゆえに」、「より大いなるもの」と言われるわけです。そして、もう一つの仕方では、信仰は「意志の側」から、「より大いなる迅速さと熱意、確信のゆえに」、「より大いなるもの」と言われます。このように、信仰の大きさということは、確実なこととして信じているとか、熱意をもって信じているという観点から言うことができる。つまり、何を信じているかということではなくて、どのように信じているかということから、より大きな信仰ということが言えるということをトマスは語っているわけです。

異教徒のほうが大きな信仰をもつ可能性

そうしますと、異教徒の信仰がキリスト教徒の信仰より大きなものでありうるということが、「基体による分有に即して」という第二の観点によってですが、そ

ういうことが理論的に言えるのではないかということになります。もちろんトマスが、そういうことを明示的に言っているわけではありませんが、理論的に考えるかぎりそう言えるのではないか、ということです。

トマス自身、次のように語っています。

第一の真理をすべてに優先させることが信仰の本質に属することである。しかるに、第一の真理をすべてに優先させる人々のうち、或る人々は他の人々よりも確実に、そしてより大いなる熱意をもって自らを第一の真理に従属させる。そしてこの意味で、信仰は一人の人間において他の人間におけるよりも大なのである。

〔神学大全〕第二・二部、第五問題、第四項〔創文社版、

第十五分冊、一四六頁〕

ここには、歴史的存在であるイエス・キリストはまったく出てこないわけで、あくまで第一真理ということだけが語られています。ですから、第一真理として

信じている。それから、その第一真理による救いということを信じているという、これはキリスト教を明示的に信じてなくても可能なわけですが、そういう人が熱意をもって信じていれば、あまり熱意をもって信じていないキリスト教の信者よりも大きな信仰をもって信じていると言えるのではないか。そういうことを、トマスが「異教徒もそうだ」と言っているわけではもちろんありませんが、理論的にはおそらくそうなるでしょうと言えらると思います。「無名のキリスト者」としては、より大きな信仰をもちうるということです。

もともとトマスは、具体的、明示的なたちで他の諸宗教を積極的に評価しているわけではありません。たとえば、トマスは異端者を死刑にすることを容認しています（『神学大全』第二・二部、第一一問題、第三項（創文社版、第十五分冊、二五八―九頁）を参照）。または、「ルカによる福音書」に、「無理にでも」という言葉——「強いて」と訳されることもあります——、「無理にでも人々を連れて来て、この家をいっばいにしてくれ」（第一四章、第二三節、新共同訳）というイエスの言葉があり

ますが、それに基づいて、不信仰者が信仰へと身体的にすら強制されるべきである、強いて、無理にでも信仰へと連れ戻すべきであると主張している箇所もあります（『神学大全』第二・二部、第一〇問題、第八項（創文社版、第十五分冊、二二八頁）を参照）。

これは、その頃、カタリ派や、アルビジョワ派という異端の活動が盛んにあったわけで、それが重大な社会的脅威であると考えられていた当時の社会的背景ということからくる時代的制約なのだろうと言えるわけですが、そのような制約にもかかわらず、トマスが信仰について理論的に考察するときには異教徒の信仰というものも積極的に認めうると解釈されるような理解に達しているということには非常に大きな意味があるように思います。

4 啓示神学における哲学の位置づけ

世界に「時間的始まり」があるか——
理性を超えた問い

最後に、神による「世界の創造」の問題に触れたい

と思います。世界に始まりがあったのか否かという問題に関して、トマスは、すべての存在者が神を原因として創られたのでなければならぬと明確に主張しています。さらに、すべての存在者の存在が全面的に神に依存しているということは、哲学的な仕方では理性によって証明できるとも主張しています。つまり、世界の全存在が原因としての神に全面的に依存しているという点では、世界には「根源」という意味での「始まり」があるということは哲学的に証明できるといえます。

ただ、世界に「時間的な」始まりがあったのか。もちろん聖書にはそう書いてあります。「創世記」の冒頭に、「初めに、神は天地を創造された」と書いてあるわけですが、それについては理性では証明できないとトマスは言います。しかし、その逆も証明できない。つまり、世界に時間的な始まりがあったということも証明できないし、時間的な始まりはなくて、永遠の過去から世界は存在していたということも証明できない。それは、啓示によって知りうることであり、信仰によ

って信じなければならぬことがらである、信じられるべき信仰箇条であるというのがこの問題に対するトマスの回答です。



イタリアのベノッツォ・ゴッツオリによる「聖トマス・アクィナスの勝利」(1471年頃、ルーヴル美術館所蔵)の一部。向かって右はプラトン、左はアリストテレス。中央のトマスの足元にアヴェロエスが倒されている。彼のアリストテレス哲学解釈は、キリスト教信仰とは相容れないものであった

「理性の限界を認識」かつ「理性の自立性を信頼」

これに対して、当時のフランシスコ会の神学者たち——ボナヴェントゥラが代表的ですが、その他にもトマスが二回目にパリ大学の教授であったときに同じパリ大学の神学教授に就任し、後にカンタベリー大司教にもなったジョン・ペッカム (John Peckham 1230-1292年) という人がいます——、彼らは世界に時間的な始まりがあったということが証明できると主張して、トマスと論争になっています。

前にも申しましたが、ラテン・アヴェロエス主義の哲学者たちは、哲学的には「世界は永遠の昔からある」ということが証明できると主張しています。それは、哲学の真理と信仰の真理は別であるということです。最後は、信仰の真理のみが真理として認められなければならないのだけれど、哲学的には世界は永遠の過去から存在していることが証明できる。その意味では真理は二つあると言ってもよい。これを哲学史では「二重真理説」と言っています。

それに対して、トマスは理性ではあるところまでは

証明できるけれども、それ以上は信仰が必要だと言うわけです。つまり、フランシスコ会の学者たちは、信仰の援けを得ない哲学は必然的に誤ると主張しましたが、トマスは、人間理性による哲学的認識には限界はあるけれども、限界のところまでは理性だけで確実な知は得られると考えています。もちろん、人間には誤るということはあるわけで、哲学者たちもたびたび誤ってきたのであり、人間の知性は非常に弱いものだということも言っていますが、原理的には理性によって人間は正しい認識に到達できるということを言っています。

その意味では、哲学というものの自立性、人間の理性の自立性ということをフランシスコ会の学者たちよりは非常に強調して言った。その意味で、トマスには人間の理性に対する大きな信頼があったと言えると思います。

「開かれた心」で学んだトマス

もう一つだけ言わせていただきますと、トマスは、

イブン・シーナー (Ibn Sina 973/980頃-1037年)

——ヨーロッパではアヴィセンナ (Avicenna) の名で知られていました——や、イブン・ルシユドといったイスラームの哲学者たち、あるいはモーセス・マイモニデス (Moses Maimonides 1135/1138-1204年)

といったユダヤ教の神学者・哲学者たちについても非常に研究して、神学や哲学の議論をするときにそういう人たちの主張もさまざまに論じたりして、彼らの説はある程度は正しいが不十分な点もあるというように、批判的な仕方で可能なかぎり取り入れています。

もちろん、区別をするわけです。どこが正しくてどこが間違っているか。ただ、ある意味非常に開かれた態度で多様な思想に接していた。トマスはいろいろな人と激しい論争もするわけですが、論敵であるラテン・アヴェロエス主義の哲学者たちからも人格的にはとても尊敬されていたと言われています。

もちろん時代的な制約もあって、異端者を死刑にすることは容認されるとか、現代では通用しないこともいろいろ言っているのは確かです。そういう意味では

トマスは中世の厳格なカトリックであるとも言えるわけですが、その一方で、非常に開かれた心をもって、非常に謙虚な人であったというところは、私たちも大いに学ぶべきことなのではないかと思います。

【質疑応答】

トマスの背景に「スコラ学の伝統」と

「大学の成立」

【質問者A】 基本的なことを教えていただきたいのですが、トマスのような天才的な神学者——とここでは呼びたいと思いますが、そういう人物がどうして生まれたのか。しかるべき時代的・社会的背景といったものがあつたのでしょうか。

【講師】 たしかに、ああいう神学者が突然生まれるわけではないと思います。

まず、いわゆる「スコラ学の伝統」というものがありました。問いを立てて、それに対して賛成と反対の立場から議論をして対決する。そして答えを出す。そ

ういう、討論というかたちで真理を探究していくというのがスコラ神学、スコラ哲学という十二世紀以降の中世後期の学問のあり方でした。先ほども申しましたように、アンセルムスが最初のスコラ学者であると言われたりします。アンセルムスは、いわゆる「神の存在論的証明」——これは「それよりも大きなものが考えられ得ない何らかのもの」という神の概念から、神の存在を論証するという証明です——を考えるなど、非常に論理的な神学をつくった人です。そういう伝統がある。彼より少し後の時代のアベラルドウスも非常に論争的な人でした。

こういう伝統に加えて、十二世紀末から十三世紀にかけて「大学」というものが成立します。はじめは学生の団体として自発的に発生したりして、そこから教師と学生の関係ができてくる。やがて、ボローニヤ大学とか、パリ大学とか、オックスフォード大学などが生まれ、教師を養成して学位を与えるというシステムができて、教育機関としての大学というものが確立したのが大体、十三世紀の前半であると言えます。トマ

スも、その直後の時期にパリ大学などで勉強して教授になったわけです。その意味で、トマスが生きた十三世紀は、体系的・総合的な知をつくり上げる研究・教育のシステムが完成された時期であつたと言えると思います。

つまり、一つには、神学的な問題について論理的に論証していくというスコラ学の流れというものができていたこと、もう一つは、大学という場ができたこと、この二つが大きな要因としてあります。しかも、ここにイスラーム世界からアリストテレスが入ってきた。アリストテレスの論理学とか形而上学とか、非常に体系的な哲学が入ってきたわけです。それが西ヨーロッパという坩堝くわぼの中に入って、トマス・アクィナスもそこから多くを学び、取り入れたという背景があるだろうと考えています。

「神を信じる」と「神の存在と配慮を信じる」

【質問者B】トマスの場合、「神を信じる」と「神の存在と配慮を信じる」ということが同じなのか別な

のかという質問です。というのは、「使徒信条」のほうでは「全能の父である神を信じます」と端的に書いてあり、一方で『神学大全』の第二部では、『ヘブル人への書翰』の中身を踏まえてはいますが、「神が存在し、摂理をもって人間の救済を配慮すること」を信ずべきだという。両者に区別があるのかないのかをお聞きしたいのですが。

【講師】 おそらく、トマスはあくまで「第一真理を信じる」という立場だと思います。そして、真理というのは、トマスの哲学では、判断による命題のかたちになります。つまり、真であるという認識は判断においてなされる。これがトマス哲学のテーゼとしてある。たとえば「リング」という概念だけだと、それだけでは真であるとも偽であるとも言えず、「リングがある」「リングがない」、あるいは「リングは赤い」「リングは赤くない」などと概念の複合・分割という仕方で判断するから、その命題について真だとか偽だとか言えるわけです。「 $1+1$ 」だと、まだ真ではないわけですね。「 $1+1$ は2である」と言うと、「あつ、それは真だ」とい

うふうになるわけです。ですから、判断がないと、真理ということすら概念としてもちえない。

このように命題というかたち——それは知性の判断の働きによるものですが——、それによって初めて真理であるという認識が成立するというトマス哲学の考え方があるわけです。それを踏まえると、何かを真であると信じるときには必ず「命題として信じている」ことになります。それを本人が意識しているかどうかは別にして。

ですから、(使徒信条で)「天地の創造主、全能の父である神を信じます」と言ったときに、天地を造った神を信じているのであれば、「神は天地を創造した」という命題が真であるということも信じているはずです。それを命題であるとは意識していないかもしれませんが。それを明示的に言うと、「天地を創造した神が存在することを信じる」というかたちになります。

もしかすると、仏教の「空」とか、そういう話もち出すと、存在するということは不変の本質である「自性」をもつということであり、現実のあり方(空)はそ

うではない、というような議論になってくるのかもしれませんが、西洋哲学の存在論では、「ある」ということが根本にありますので、やはり「神を信じる」のであれば、「神が存在していることを信じる」ことはその中に含まれていると言えるのではないかと思います。また、「全能の父である神を信じる」ことの中には、その父が「父」として、父を求める人々に報いてくださる、摂理をもって人間の救済を配慮してくださることを信じるということも含まれていると思います。

二種の学、それぞれの論証法

【質問者C】「テオロギア」(theologia 神学)という言葉と「サクラ・ドクトリーナ」(sacra doctrina 聖教)という言葉があつて、トマスは自分の体系を後者の名で呼んだとのことですが、その「ドクトリーナ」という言葉はトマスにおいて、どういった意味で使われているのか。「聖なる教え」という、その「教え」の部分がどういったものであるのかを、もう少し詳しく教えていただければと思います。先生は「スキエンティア」

(scientia 学)については、論証によって確実となった知というふうに言われましたが、それと比べて「ドクトリーナ」の含意は何なのか。単なる「教え」ということだけではなくて、啓示と結びついているような感じがしますが……。

【講師】「ドクトリーナ」という言葉が中世を通してどう使われていたかということに関しては、勉強不足で私もくわしくはわかりません。ただ、アウグスティヌスに『キリスト教の教え』(De doctrina christiana)という著作もありますので、「ドクトリーナ」をキリスト教の「教え」について使うという伝統は、当然あっただろうと思います。また、「ドクトリーナ」というラテン語は「教える」(docere)という動詞に由来していますので、この言葉によって人間の救いに必要な知が人間の力によって得られるものではなく、啓示によって神から「教えられた」ものであることが示されるのではないかと思います。

先ほどは、あまりくわしくご説明できなかったのですが、学問における二つの論証の仕方という問題があ

ります。「哲学的な学問」と「啓示神学的な学問」を区別する場合に、その論証の仕方が異なるわけです。「聖教は学であるか」というところで、トマスは二つの学を区別しています。

聖教は学である。ただし、学に二通りの種類があることを心得ていなくてはならぬ。すなわち、一部の学は、知性の自然的光によって明らかとなった諸々の基本命題から出発する。数学・幾何学・等等がそれである。これに対してまた一部の学は、上位の学の光によって明らかとなった諸々の基本命題から出発する。……いま、聖教が学であるのはこの第二の仕方による。つまり、それは上位の学——すなわち神ならびに至福なる者たちにおける知——の光によって明らかとなった諸々の基本命題から出発する。〔『神学大全』第一部、第一問題、第二項（創文社版、第一分冊、八頁）〕

ここで述べられているように、一部の学は知性の自

然的光によって明らかになった諸々の基本命題から出発する。これは数学の公理みたいなものですが、それ以前には邇れない、自明的に明らかであるような命題です。たとえば、同一律とか矛盾律などの論理的な法則も含まれるわけですが、それは人間の自然的な理性だけでわかる命題です。そういう基本命題から出発して論証していく。それが、数学や自然学などの諸科学であり、哲学的な学です。

もう一つは上位の学の光によって明らかとなった基本命題から出発する。聖教が学であり、論証的な知識であるのはこの第二の仕方です。神や至福なる者たち、聖者たちにおける知の光によって明らかとなった命題から出発する。その命題が真であることを、神はわかっているわけです。西方教会には人間の至福とは「神を見ること」(visio Dei)であるという考え方が伝統的にありますが、それはこの世に生きている人間には可能ではありません。しかし、聖者のように天国で神を見ている人たちにははっきりわかっている。それを、啓示を通して我々は受け取るのだということです。それ

は、信仰によって受け入れるしかないわけです。

しかし、その諸々の基本命題から出発して、そこから論理的に論証していくという点では論証的な知である。それが確実な知である根拠は、神の知、これは神自身もっている知ですね、その真理に依存している。その意味では、信仰ということは必要なわけです。それを信じるしかないわけですが、そして、それは人間の力では可能でなくて、神の恩寵・恩恵によって可能になるといふことをトマスは言うわけですが、それを前提として、あとは論証していくという仕方です、神学の結論は確実な知としてある。その意味で、神学は学であるといふことをトマスは主張しているといふことだろうと思います。

（しばもと こうへい／上智大学非常勤講師）

※2015年12月10日に行われました。